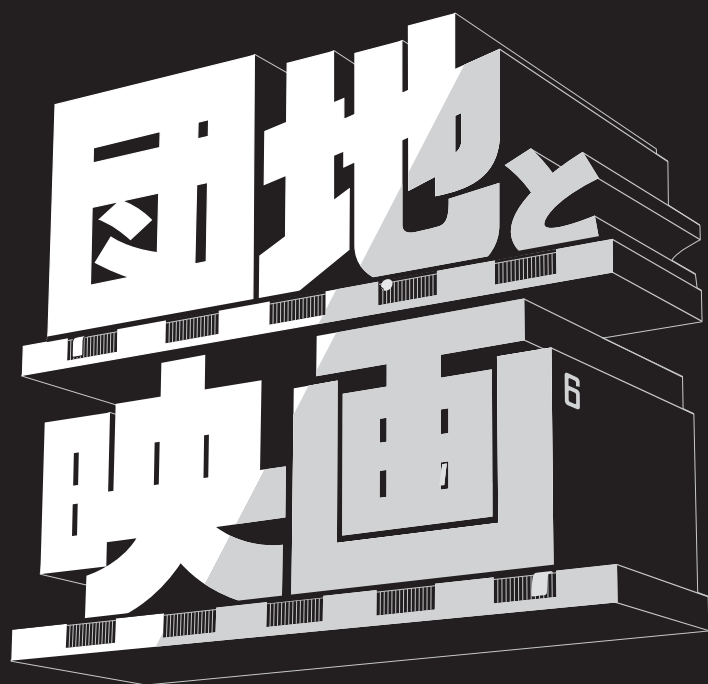


TAKE FREE

高島屋史料館 TOKYO



世界は団地でできている

もっと
楽しむ 29 冊

選書・文 団地団

(大山顕、佐藤大、速水健朗、稲田豊史、山内マリコ、妹尾朝子)

01

『団地団 ベランダから見渡す映画論』

大山 顕・佐藤 大・速水 健朗 (著),
キネマ旬報社

団地団の初期メン3人が2010年から11年にかけて行った鼎談トークライブを再構成して膨大な脚注を加筆し、グラビアページで団地ロケまで敢行した贅沢な1冊。「団地がフィクションでどのように描かれているかを語ることで、時代や社会のありようを説き、映像論をぶつ」という団地団の方法論が凝縮されている。フィクションの読み解きに団地という補助線を引くだけで、ここまで面白くなるのだ。

02

『世界は団地でできている (仮)』

団地団 (著), 集英社

*2025 夏刊行予定

13年ぶり2冊目の共著。6人になった団地団のトークを、地の文に6人のやり取りを挿入する形で再構成。70年もの間フィクションで描かれ続けてきた団地が、時代ごとにどんな毀誉褒貶にさらされてきたか、団地に住む「女性」がどう描かれてきたかを時系列でたどる。日本橋高島屋の展示『団地と映画』の展示物の一部も収録。団地団の15年にわたる「団地映画語り」の集大成である。

03

『みなさん、さようなら』

久保寺 健彦 (著), 幻冬舎

久保寺健彦による団地青春小説。幼少

期のある出来事をきっかけに、団地から出られなくなった少年が、文字通り団地の中だけで生活続け、青年として成長し、団地から出ていくまでのお話。長いスパンで団地が描かれるので、団地最盛期から団地量産期を経て、住民の高齢化問題、移民問題なども扱う。団地の栄枯盛衰が、主人公の成長と共に体験できる。

04

『リバーズ・エッジ オリジナル復刻版』

岡崎 京子 (著), 宝島社

東京出身の岡崎京子は、二度団地を舞台に時代の空気を描いた。80年代は『ジオラマボーイ・パノラマガール』で、少年少女のポップな恋愛模様を。主人公・ハルコは軽やかに団地を飛び出し街へ繰り出す。一方90年代に描かれた『リバーズ・エッジ』は、どこにも逃げ場のない少年少女が名前のない関係性のまま集い彷徨い、団地はまるで閉塞感を体現する檻のよう。そして両作品のラストはなぜか「UFO」で締めくくられる。

05

『安野モヨコ選集 プレイボーイ団地／脂肪と言う名の服を着て』

安野 モヨコ (著), 小学館クリエイティブ

団地出身の安野モヨコは、何度か作品を通して団地と向き合っている。今作の主人公は、行き詰まった人生から上手く抜け出せずもがく、引きこもりの女性。唯一部屋から抜け出し外部とつながる方

法が幽体離脱。圧倒的質量で敷地内に群生している団地は、外部からは容易に中に入れない結界が張られているよう。しかし中で生活している人間にとっても、その大きすぎる質量で圧死寸前…と言わんばかりの閉塞感が漂う。

06

『童夢 (OTOMO THE COMPLETE WORKS 8)』

大友 克洋 (著), 講談社

漫画界の鬼才・大友克洋が、「団地作品」というジャンルをはじめて世間に知らしめた怪作。高層団地を舞台に少女と老人が超能力バトルを繰り広げる。なにはともあれ描かれる団地がカッコいい!「規格化された団地に住んでいる」という団地っ子の劣等感を救った。舞台となった芝園団地は、鉄道の騒音から近隣住民を守る防音壁の役割を果たしており「日本四大防壁団地」のひとつである。

07

『団地のふたり』

藤野 千夜 (著), 双葉文庫

08

『また団地のふたり』

藤野 千夜 (著), U-NEXT

2024年9月にNHK BSで放送された同名ドラマの原作。団地で暮らす50代独身女性ふたりの日常を全5話で綴る。ドラマを観てから原作を読むと、情報量の「少なさ」と描写の「あっさり度」をやや意外に感じるが、原作がエッセンス以外

を潔く刈り落としていたからこそ、映像化に際してのクリエイティブが開いたのだとも言える。「脚色とはなんぞや」について考えさせられる1冊。

09

『団地映画論 居住空間イメージの戦後史』

今井 瞳良 (著), 水声社

開催中の『団地と映画』展で提起されたトピックを、学術的観点からもっと深く考えたいという方は本書を読むべし。居住だけではなく、ジェンダー、働き方、災害・被災者へのイメージに至るまで、団地映画が、いかに戦後から現代に至る日本社会を裏面から描いてきたかが丁寧に示される。充実の脚注・参考文献リストだけでも買う価値あり。

10

『芝園団地に住んでいます 住民の半分が外国人になったとき何が起きるか』

大島 隆 (著), 明石書店

芝園団地は、2010年代から「外国人住民が増え、トラブルが絶えない”荒れた”団地」として語られていた。第1次トランプ政権下の「分断」を取材した新聞記者が、あえてこの団地に引越し、暮らしながらその実情を描いたルポルタージュ。いまこそ読まれるべき団地本。

11

『三丁目が戦争です』

筒井康隆(著) 永井豪(絵), スローガン
1971年発行の絵本が復刻。「戦争に勝者などいない」というあたりがメッセージになるのだろうが、この作者ふたりである。そんな単純ではない。また、「戦争の舞台がなぜ団地なのか」や、男子と女子を分断させて描くやり方など、初版当時は見えなかっただろうポイントが今読むと興味深い。いま、そういう観点込みで読むべし。

12

『サザンウィンドウ・サザンドア(フィールコミックス)』

石山 さやか(著), 祥伝社

団地を舞台に繰り広げられる、全12話のオムニバス短編集。「住民たちが共同廊下で花火を観る」「隣の部屋の換気口から風呂の匂いがする」「棟全体の火災報知器が鳴る」など、団地特有の構造や設備が物語展開上の重要な要素になっている。単に舞台として団地を採用したのではない、団地でなければ起こり得ない物語だけが綴られた、正統かつ真っ当な団地漫画だ。

13

『「耳をすませば」スタジオジブリ絵コンテ全集10』

宮崎 駿(脚本・絵コンテ), 徳間書店

団地団が選ぶ団地映画賞で助演「団」優賞を受賞した作品の絵コンテ集。団地

の登場するアニメとして最高峰の作品が、どのような画面設計から完成したのかを知ることが出来る。脚本とコンテを担当した宮崎駿と監督の近藤喜文による緻密な描写で団地を描く肉筆を眺める貴重な本。ちなみに原作の漫画では団地は登場していない。

14

『千の扉』

柴崎 友香(著), 中公文庫

「団地に住んでるはずの高橋さんを探してほしい」。結婚を機に団地に越してきたばかりの女性・千歳が、義父に頼まれ人探しを始める。読み手は彼女と共に団地の敷地を、一棟一棟の建物を、縦に横に歩きまわり、土地の記憶を宿す広い敷地や地形から、時代さえ遡る。規格化された建物が立ち並ぶ団地でも、一歩中に入ってつぶさに観察してみれば、ひとつとして同じ生活はなく、歴史も積み上がっているのだと知る。

15

『レッドアローとスターハウス もうひとつの戦後思想史【増補新版】』

原 武史(著), 新潮選書

鉄道と団地から政治思想に結びつけるといのは、かなり風変わり。でも、確かに東急、小田急、西武、中央線とまるで違う色を持っているし、団地のあり方もまるで別。それをあえて大真面目に考えてみるという1冊。解説は、「団地団」メンバーの速水健朗。

16

『ハイ・ライズ』

J・G・バラード (著) 村上 博基 (訳),
創元SF文庫

著者の「テクノロジー 3部作」の1つとして知られる1975年の長編小説。商業施設やスーパーやプールの施設を備えた40階建ての巨大高層住宅を舞台に、上層と下層フロアに分断した住民たちが血みどろの戦いを繰り広げる。高層住宅をディストピアとして描いているが、こんな大規模住宅に住んでみたいと個人的には思う。

17

『インフルエンス』

近藤 史恵 (著), 文春文庫

巨大団地に暮らす公立中学の少女3人。体罰、校内暴力、いじめ、息苦しい思春期とその20年後に起きる殺人事件を描いた小説。ここでの団地は、人間関係の入れ替わりが少ない、閉ざされた共同体。『家族ゲーム』(本間洋平)や『童夢』(大友克洋)に通じる、80年代的ディストピアとしての団地像を見て取ることができる。

18

『まだ、うまく眠れない』

石田 月美 (著), 文藝春秋

『ウツ婚!!』著者のエッセイ風自伝。悪い連中とつるんで遊んでいるうちに高校中退してしまう青春の舞台として団地が登場する。『ウツ婚!!』は、岡崎京子オマー

ジュの多い1冊だった。そしてその著者の人生は、どこか岡崎漫画の主人公っぽい。

19

『八月の母』

早見 和真 (著), 角川文庫

実在の地方の団地で起きた事件を題材にしたフィクション。思い浮かべるのは北九州監禁殺人だ。監禁と洗脳の末の陰惨な事件と、本作で参照される少女殺人事件の構図が似ている。目を背けたくない事件だが、そこ(団地、またはその町)から出て行けたはずの少女は、なぜ出ていけなかったのかに作者が迫っていく。

20

『マンモスの抜け殻』

相場 英雄 (著), 文春文庫

都営戸山団地をモデルにした社会派団地ミステリー。刑事は、80年代に団地で少年時代を過ごしたかつての『団地ともお』的な奴。容疑者たちは団地の幼なじみたち。事件を通し、独居老人問題や介護ビジネスの現実が描かれる。団地作品には、団地社会派もあるということ。世間でいま団地と言ったら、こっちのイメージが強いはず。

21

『しあわせは食べて寝て待て1 (A.L.C.DX)』
水風トリ (著), 秋田書店

薬膳料理と団地をテーマにした漫画。2025年、NHKで桜井ユキ主演によりドラマ化された。主人公は、ある事情を抱えて団地に越してきた女性。隣に住む大家(ドラマでは加賀まりこが演じる)と、やがて食を通じて少しずつ心を通わせ、団地での暮らしを受け入れていく。ドラマの撮影には、滝山団地が使われている。

22

『団地の時代』

原 武史・重松 清 (著), 新潮選書

団地歴ありの小説家(重松清、1963年生まれ)と政治思想研究者(原武史、1962年生まれ)の対談。かつての団地は、夫婦だけの空間がなく、団地の近くにはあやしいホテルが建っていたという話が印象的。

23

『団地メシ!』

藤野 千夜 (著), 角川春樹事務所

『団地のふたり』の著者による団地食べ歩き小説。祖母と不登校の高校生の孫娘コンビが団地を巡る。登場する団地も、カフェや食べ物屋もどれも実在するというのが魅力。ちなみに出てくるのは、神代団地、豊洲4丁目団地、都営調布くすのきアパート、祖師谷住宅などナイスチョイス。

24

『映画を撮りながら考えたこと』

是枝 裕和 (著), ミシマ社

是枝裕和監督が自身のキャリアと過去作を振り返る1冊。団地を舞台にした『海よりもまだ深く』には、樹木希林演じる母親が台風の思い出を息子に語る場面がある。このシーンには、監督自身の父親との記憶が投影されているという。実体験を作品に直接反映させることの少ない是枝監督にとっては、めずらしいエピソードだ。

25

『海よりもまだ深く』

佐野 晶・是枝 裕和 (著), 幻冬舎

団地団が選ぶ団地映画賞で主演「団」優賞を受賞した作品のノベライズ。監督である是枝裕和の手による脚本をベースに共著者の佐野晶によって、あくまでも映画に寄り添った表現で作品を再現している。また設定部分での補完も含む、登場人物たちの心情を補足する意味での副読本としても機能している。舞台となった「旭が丘団地」などの地名が、そのまま登場するところが嬉しい。

26

『月刊「東京人」2023年10月号 特集「赤羽台を歩いて学ぶ団地の設計史」』

東京人編集室 (編), 都市出版

『団地と映画』展の監修メンバーのうちのふたり、小説家の山内マリコと写真家の大山顕が登場。八王子から赤羽台団地内に移転・パワーアップした団地ミュー

ジウムを訪ね、語っております。いわば『団地と映画』展の予行演習だった。

27

『団地再生 甦る欧米の集合住宅』

松村 秀一（著），彰国社

2001年初版の、団地リノベーションに関する最初期のひとつ。いま話題の団地再生だが、本書のような取り組みが20年越しで花開いているのだなあ、と実感する。当時はまだ国内の事例は少なく、日本の事例はひとつもないが、デザインの話から資金調達方法、組織の作り方まで解説されたわかりやすい概論。

28

『団地の空間政治学』

原 武史（著），NHK出版

団地を「家族」ではなく自治会に代表されるような「地域」と結びつけて論じた1冊。ともすれば「逃げ切った世代」と「負債を押しつけられた世代」などと世代間の争いになりがちな昨今の政治的状況だが、100年、200年という単位で見れば、ぼくらは「団地の時代」を共有するひとつの世代なのだ。インフラとしての住宅、つまり団地とはそういう単位でものを見るための器でもある。

29

『燃えつきた地図』

安部 公房（著），新潮文庫

失踪した男を捜して団地を訪ねる探偵の物語。不思議な小説だが、探偵が追っている失踪者の正体は、実は自分自身だったとも読める、ループ構造を持つ小説。それゆえ、反復する住宅としての団地を舞台にしたのかも。ちなみに、公房は火星人が団地に住んでいるというSF小説『人間そっくり』も書いてる。団地好き作家の筆頭。

『団地と映画』展 監修《団地団》メンバープロフィール

大山顕（おおやま・けん） 1972年生まれ。写真家／ライター。工業地域を遊び場として育つ。千葉大学工学部卒後、松下電器産業株式会社（現Panasonic）に入社。シンクタンク部門に10年間勤めた後、写真家として独立。団地研究家としての顔も持つ。執筆、イベント主催など多様な活動を行っている。著書に『ショッピングモールから考える』（東浩紀・大山顕 著、幻冬舎新書、2016）など多数あり。

速水健朗（はやみず・けんろう） ライター・編集者。メディア史や都市、ショッピングモールなどのテーマであれこれを執筆。物心ついて以降の人生で住んだことのある住宅は、団地（社宅タイプ）5年、一軒家8年、木造アパート4年、賃貸マンション8年、分譲マンション19年。最高階位は、10階（14階建てマンション）。主な著書、『東京どこに住む 人生格差と住所格差』（朝日新書）、『1973年に生まれて 団塊ジュニア世代の半世紀』（東京書籍）など。

山内マリコ（やまうち・まりこ） 1980年生まれ。小説家。富山県の住宅街で育つ。郊外的大型書店&レンタルビデオ文化によって映画と小説に目覚め、大阪芸術大学映像学科に進学。2008年「女による女のためのR-18文学賞」読者賞を受賞し2012年『ここは退屈迎えに来て』でデビュー。団地団の第1回イベントに客として参加していた縁で途中加入。映画化された『あのこは貴族』、近刊『マリリン・トールド・ミー』『逃亡するガール』など、地方都市で生きる女性を主なテーマとする。

佐藤大（さとう・だい） 19歳の頃、放送構成・作詞の分野でキャリアをスタート。その後、ゲーム業界、音楽業界を経て、現在はアニメの脚本執筆を中心に、さまざまなメディアでの企画、脚本などを手がけている。2007年、ストーリーライダーズ株式会社を代表取締役として設立。代表作に『カウボーイビバップ』『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』『サムライチャンプルー』『交響詩篇エウレカセブン』『サイダーのように言葉が湧き上がる』『映画ドラえもん のび太の宇宙小戦争 2021』『ぼくらのよあけ』『ポケットモンスター』など多数あり。

稲田豊史（いなだ・とよし） 1974年生まれ。ライター、編集者。新卒でギャガ・コミュニケーションズ（現ギャガ）に入社。その後、キネマ旬報社でDVD業界誌の編集長、書籍編集者を経て2013年に独立。主な著書に、新書大賞2023第2位の『映画を早送りて観る人たち』（光文社新書、2022）、『ぼくたちの離婚』（角川新書、2019）、『ポテトチップスと日本人』（朝日新書、2023）がある。キネマ旬報社時代には『団地団 ペランダから見渡す映画論』（キネマ旬報社、2012）の企画、編集も担当した。

妹尾朝子（せお・あさこ） 二人組漫画家“うめ”の作画担当。2001年『ちゃぶだい』で第39回ちばてつや賞一般部門大賞を受賞。代表作は、ゲーム業界を描いた『東京トイボックス』シリーズ。シリコンバレー IT群雄割拠『スティーブズ』（原作：松永肇一）、育児ハックマンガ『ニブンノイクジ』など。現在は、日本の第一次南極観測隊のタロジロたちは実は人狼だった、という大胆なIFをベースにした歴史改変SF『南緯六〇度線の約束』を小学館ビコミにて連載中。

展示情報

団地と映画 一世界は団地でできている

2025年3月12日（水）→8月24日（日）

10:30-19:30 入館無料

高島屋史料館TOKYO 4階展示室

東京都中央区日本橋2-4-1 日本橋高島屋S.C. 本館

休館 火曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）、

8月20日（全館休業）



丸善日本橋店から

高島屋史料館TOKYOへのアクセス

